

- (3) 研究会
(4) 外来研究員

申込み資格はいずれも国、公、私立大学その他の研究機関の研究者ならびにこれに準ずる者で海洋の基礎的研究に従事するものとなっています。なお、公募に関する詳細は各大学、関係機関に配布されているが、ここではその概要を各項目ごとに紹介したい。

(1) 研究船淡青丸

本船は昭和39年就航し、40年度より共同利用に供されている260トンの研究船で主として近海の7日～10日の研究航海に使用されている。1回の乗船人員は10名以内である。採水、採泥に必要な機器をそなえ、船上の実験室においても分光光度計などの使用は可能である。各年度の航海計画は公募の結果、決定されるが、一年間の船の運航日数は200日である。

(2) 研究船白鳳丸

本船は昭和43年度より共同利用に供されている主として遠洋航海の大型船(3200トン)であって、乗船研究者数は32名、各種の実験室は9室ある。実験室の振動はほとんどなく、実験用電源もきわめて安定しており、陸上の研究室と大差なく船上で研究が行なえる。本船の運航計画は海洋に関係のある地球科学者によるシンポジウムによって、昭和45年度までの運航の大綱が決定されており、明年度はその最終年度にあたる。昭和45年度の運航計画は表1に示してあるが、この中でとくに化学関係に重点がおかれているのはKH-70-2北太平洋の航海である。

表1. 昭和45年度白鳳丸運航計画

航海番号	海 域	期 間	日数	関連分科会
(昭和44年度) KH-70-1	北太平洋	昭和45年 2月3日～ 3月5日	31	物理、化学
(昭和45年度) KH-70-2	北太平洋	4月14日～ 6月18日	66	物理、化学
KH-70-3	九州南方	7月3日～ 7月22日	20	物理(気象)
KH-70-4	日本海	7月29日～ 8月31日	34	生物、水産
KH-70-5	フィリッ ピン海盆	昭和46年 1月21日～ 3月23日	62	地物、地質

(3) 研究会

研究会は(a)いわゆる討論会形式の比較的多人数の1～2日間のもの(b)限られた人々による数日間にわたるものなどが考えられています。本年度は試験的に(a)の形式のものがいくつか実施されています。申込みにあたっては、海洋研究所の最も関連の深い部門と連絡を取

って、下記の事項について打合せをして戴くことになっています。1. 研究会の名称、2. 提案理由、3. 開催希望月日、4. 参加予定者数、など。

(4) 外来研究員

所外の研究者が海洋研究所に滞在して研究を行なう便宜を提供することを目的としているものです。目下のところ、特定の籍などはありませんので、各研究室内で実施することになります。申込みにあたっては、1. 研究テーマ、2. 滞在予定期間、3. 必要経費、4. 研究の内容などを関連の深い部門と連絡を取って打合せて戴くのが好都合です。

これらの共同利用の申込みの採否、運航計画の決定は共同利用施設運営委員会で行ないます。現在の同委員会のメンバーは下記の通りです。

委員長	名大	名誉教授	菅原 健
	東北大	助教授	金谷 太郎
	東大震研	教授	南雲昭三郎
	名大理	〃	西条 八東
	東大理	〃	吉田 耕造
	東大海洋研	〃	内田清一郎
	〃	助教授	寺本 俊彦
	〃	教授	丸茂 隆三
	〃	〃	西脇 昌治
	〃	〃	堀部 純男

なお、化学関係の詳細の問合せ、打合せ先は下記の通りである。また、(3)、(4)の正式申込用紙は事前の打合せ終了後にお送りすることになっております。

問合せ、打合せ先(化学関係)

東京都中野区南台1-15-1

東大海洋研究所

海洋無機化学部門 堀部純男

電話 03-376-1251

お知らせ

1970年度地球化学討論会について

すでに総会記事の所に書いてありますように、来年度の討論会は静岡県清水市の東海大学で11月末に開催される予定です。討論題目その他につきましては追ってお知らせ致します。

学会事務所 名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部 地球科学教室内
ニュース 東京都世田谷区深沢2-1-1
発行所 東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 一國雅巳・石渡良志

日本地球化学会 ニュース

No. 48

1970. II. 26

地球化学会の行事

— とくに例会と討論会について —

一 國 雅 巳・石 渡 良 志

今からおおよそ2年前、庶務担当評議員の交代に伴ってニュース編集担当者が変わりました。そのときニュースに会員からの意見をできるだけ載せることをお約束しました。しかし紙面の都合もあり、それはほとんど実行されませんでした。この2年間に地球化学会の行事その他についていろいろ意見、感想をいわれた方もありましたが、それをまとめて発表する機会もなく、ついに現在のニュース編集者が担当する最後の号をむかえました。

そこで今まで伺ってきた会員からの意見にわれわれの考えを加味し、下記の文をまとめました。

地球化学会の新評議員会は、これらの会員の意見を参考にして今後の方針を立てていただきたいと思います。

——例会の講演者や講演の題目はどのようにしてえらばれるのか知りたい。

——行事担当の評議員がいて、適当な方に相談して候補者を評議員会に推せんしている。この方式ならばある程度は会員の意向が反映されるのではないか。

——しかし、場合によると行事担当評議員が候補者をみつけるのに苦労するという話もあるが。

——例会に続いて評議員会があるというきまりはどうか、聴いている人は評議員が多いように思う。

——例会には外国から帰ってきた人の話が多いが、たまには討論会の課題討論でも話す時間が不足だったものをじっくり聴いてみたい。

——今までは講演者に旅費の支給ができなかったのが、講演をお願いする人の範囲が限定されてしまったが、今後は改善されるのではないか。

——毎年月の例会は人の集まりがよくない。

——役所は年度末になるし、大学関係は試験で時期がよ

くない。現在、例会は2月、6月、12月にあるが2月でなければいけないという必然性はないようだ。

——東京以外で開いた例会は名古屋の2回だけだが、ぜひ聴く人が多かった。

——内容もある程度は開催地の希望をきいている、東京の例会はどちらかといえばお座りの感じだ。

——出席者が一般に少ないのだから、例会の講演要旨を以前のようにニュースかなにかに載せてはどうか。

——なぜニュースに講演要旨がでなくなったのか、多分学会誌がでるようになってからだと思うが、“地球化学”に講演要旨を総説的に書いて載せたらよい。

——それにしても“地球化学”はなかなか発行されないたまにしか出ないから投稿する人もない。そこでますます出にくくなる。悪循環だ。年三回発行されれば投稿する気になるが。

——例会の講演者のことだが、たとえば地質関係の人で海外の研究所へ行ってきた人などを評議員会へ紹介するようにしなければならない。これまで学会活動に参加していなかった人を積極的に引き出す努力が必要だ。

——地球化学会では講演しても反響がなくてつまらないという人がいた。地球化学という以上は、もっと岩石の成因などに関した議論をするようにしないと、地質関係の人たちの参加は望めない。

——最近地学関係の講座で地球化学の色彩の強いものができたが、そこを学会として支援することも必要ではないか、その目的に例会や討論会を利用してはどうか。また、化学教室で地球化学をやっている人の多くは恵まれない環境のもとにいる。

——一体例会をやる意味があるのか。

——他の学会ではどうか。
——地質学会は支部によってはやっているようだ。ただ回数は少ない。質量分析の方では関東地区談話会がある。
——例会を開くなら、いつも同じ場所ですらず、他の所を物色してほしい。会社で開いても向うは宣伝にもなるし喜んでくれるだろう。
——いっそ例会をやめて、討論会でもう少し時間をとったらどうか。
——現在でさえ、講演数が多すぎて3日にわたって討論会を開いている。これ以上の延長は無理だと思う。むしろ討論会のほかに、一般講演を主とした年会を開くべきだ。そして討論会は課題に重点をおいた方がよい。
——例会の講演者にしても名の通ったえらい人でなく、新人を発掘すべきだ。
——その意味では評議員の構成も変えて行かないといけない。専門別や所属別などを考慮して、評議員候補者を推せて出すようにすべきではないか。
——世代を若くする意味で学会活動に関与する人に進んで若い人を起用すべきだ、とくに編集・行事委員会などに若い人を入れてほしい。
——行事委員会活動を活潑にするために、担当評議員に幹事をつけてもっと動けるようにしたらよい。
——若い評議員がなかなか現れない理由を考えてみると、旅費が限られているから若い人はそうしばしば評議員会に出ることもできない。若い人が当選してもかえって迷惑になってしまう。会はこのことについて財政面で配慮する必要があるだろう。
——また評議員会の審議をもっと会員の身近なものにす

る努力があってよい。会員が未決のことについて意見を述べる機会はほとんどない。
——また例会の話にもどるが、ほかの学会誌、あるいは新聞などに地球化学会の例会の題目位は出した方がよい。また会員には要旨を配ってもよいのではないか。
——例会も地域ごとに聞くことはできないか、すると地方の人もやり易くなる。会は会場費位を補助すればよいのだから、これは地方の活動をバックアップすることになる筈だ。
——火山学会は春と秋の2回大会を開いているが、地球化学会もそれができるとよいと思う。春は年会とし、秋はシンポジウムに徹底するのも一案である。
——討論会の課題討論についていうならば、コンビーナーがしっかりしてほしい。
——近頃エスクカーションがつまらなくなった。これは討論会の開催地が限定されているためではないか。地方で開くとき、東北とか四国へ行くのも一つの方法である。
——討論会の開催地についても発想の枠がきまってしまうようだが、どうしても評議員のいる所ばかり考える、悪くいえば評議員中心主義だ。評議員のいない場所でも開ける筈だ。何から何まで評議員の手弁当という考え方は古い。財政的補助があれば、必しも評議員がいなくてもいい。財政の考え方に会の体質の古さが感じられる。
——会員がどんどん意見を出すべきだとは思いますが、それをいう場もあまりないし、ルートも確立されていない。どのように会員の声を吸い上げて行くかは、今度の評議員会にとって一つの課題となろう。

南 極 の 地 球 化 学

鳥 居 鉄 也

日本の南極観測も、いわばパイオニア時代をおえて「科学研究時代」に入ったといわれる。じっくりと腰を構えてサイエンスと取り組むことになったのである。

本年12月に第12次隊が派遣されるが、史上始まって以来、最初の地球化学担当の越冬隊員1名が認められた。テーマは「南極水圏の物質循環に関する研究」である。もちろん、今までにも、夏隊に何人かの仲間が参加し、また私自身も越冬して多くの試料が持ち帰られ、多

数の研究者によって様々な成果が得られたことは、地球化学討論会や南極研究グループの集会を通じて、会員諸兄も先刻、ご承知のことと思う。

今回の計画としては、雪氷部門と協力して大陸氷のdeep core samplingをおこなうことと、海洋では生物部門と協力して、リュッツォホルム湾における物質循環と取り組むことになるだろう。

もう1つ、南極大陸の昭和基地とは反対側にあるドラ

イバレー地域（ビクトリアランド）における観測にも、昭和45年度文部省予算が認められた。

ドライバレーについては、私はじめ何人かの地球化学の仲間が、1963年以来4回訪問して調査をおこなった。そこは、アメリカの最大の基地マクマードからヘリコプターで1時間以内の距離にあり、1965年にはアメリカ隊が越冬基地を設け、日本からも地球化学者を1人越冬させる計画があったが、ベトナム戦争による予算節減のせいか、つぶれてしまった。

ところが、この計画をニュージーランドが肩代りし、1968—69年には「バンダ湖」のほとりに越冬小屋を建設し、1969年第1回の越冬が5名（うち1名アメリカの気象観測要員）でおこなわれた。[1968年12月に私が訪問したところ、ニュージーランド南極局長から、日本からもぜひ越冬に参加しないかと要請されたのである。

ドライバレーは、地球化学から見て、まことに興味深い地域である。スヴェン・ヘディンが中央アジアの「さまよえる湖」、ロブ・ノールに燃やしたと 同じような情

熱を感じさせる。塩湖の成因、物質収支や熱収支の問題、アザラシのミイラ、硫酸カルシウムや硫酸ナトリウムの鉱床、etc.

昭和45年度には越冬1名の派遣が認められたので、本年12月出発が予定されている。また、塩湖や鉱床の成因に関連して、現地におけるボーリングを1つの鍵を握るものと考え、アメリカ科学財団と協力して実施すべく申し入れをおこなっている。

地球化学のフィールドとして、月や火星はともかく、地球上に残された、まだ手をつけられていない広い地球、南極に多くの前途有為の新進地球化学者が目を向けられることを切に望んでいる。

ニュース編集部追記：本年度の隊員の選考はすでに終了しておりますが、今後のこともありますので、関心をお持ちの方は、日本学術会議南極特別委員会、鳥居鉄也委員までお問合せ下さい。

1969年度 会 計 報 告（4月1日～12月31日）

(収 入)		編 集 費	25,000 円
繰り越し金	369,644 円	討論会補助金	10,000
正会員費	732,246	講師謝礼金	24,000
賛助会員費	220,000	銀行等手数料	26,940
会誌購読料	393,954	例会、委員会々場費	18,300
別刷代	63,605	事 務 費	57,256
広告代その他	46,011		
文部省補助金	100,000	計	1,009,238 円
計	1,925,460 円	差し引き残高	916,222 円
(支 出)		残高内容	
会誌等印刷費	485,600 円	銀行預金	416,308 円
ニュース印刷費	72,100	振替 〃	486,165
郵便費	130,463	現金	13,749
人件費	159,579	計	916,222 円

評議員会報告

○6/14/69 学士会館本郷分館
浜口博副会長を委員長とする選挙方法検討小委員会から役員選挙方法に関する内規案が示されたが、会則第12条との関連の問題で議論があり、結論はえられなかった。そのため、次期評議員の選出は従来通りの方法で本年9月末に実施することになった。

○10/13/69 京都大学楽友会館
臨時総会への提出案を審議した。

地球化学の教育面での将来計画を立案するため、浜口博副会長とする委員会が発足した。

○12/13/69 名古屋共済会館

将来計画委員会の第1回の会合が12月6日に東大で開かれた。この委員会は主として地球化学教育機関の拡充案などを検討する。

本会の事務所を名古屋大学理学部地球科学教室から気象研究所へ移すことになった。ただし、1970年度については、庶務・会計担当の評議員は各2名づつおき、そのうち1名づつは気象研究所外の評議員をもってあてることが条件として提示されたが、これについては次期の評議員会にまかせることにした。

1970年からは原則として Geochem. J. を年4回、地球化学を年1回発行することにしたので、会則第13条のカッコ内の部分、“原則として年2回”を削除することが提案された。

新 会 員

(1969. 6. 1. ~ 1969. 12. 15.)

小椋 和子	東京都立大理化	東京都立大理	(1958)
田上 征志	北大水産海洋化	北大	(1967)
重原 好次	東大海洋研	東京都立大理	(1960)
加藤 昭	国立科学博物館	東大理	(1954)
亀田 秀男	昭和石油中技研	静岡大理	(1969)
古川 征弘	名大理水質研	鹿児島大理	(1969)

大原 洋治	和歌山工高専	京都工業繊維大	(1960)
加藤 拓紀	室蘭工大工化		
新名 朋次	室蘭工大工化		
島田 忠夫	地質調査所	北大理	(1944)
有賀 勲	地質調査所	東京理科大	(1968)
矢崎 清貫	地質調査所	地調養成所	
守屋 資郎	東北大理岩石	東北大理	(1967)
大平 洋子	東工大工地質鉱物	東京理科大	(1967)
大迫 次郎	東北大理岩鉱	東北大理	(1969)
井原 智	学習院大理大学院		
田島 栄作	群馬大工分析		
村上 敏治	姫路工大化学	京大理	(1941)
滝島 常雄	群馬県衛研	東北薬専	
小島 尚三	室蘭工大大学院		
三木 勇	久保田鉄工	阪大工	(1949)
桑本 融	京大理化分析	京大理	(1953)
小川 浩	神奈川工試	芝浦工専	

(カッコ内の年号は卒業年次)

あ と が き

役員の改選にともない本ニュースをもって編集担当者も交代することになりました。ニュースをもっと読みやすいものにしようと、はじめはいきごんだのですが思うようにはいきませんでした。2年間会員からの便りはほとんどなく、またニュースらしからぬニュースとなっている現状には非常に問題があり大巾な改善が必要と感じました。

学会事務所 東京都杉並区高円寺北4-35
気象研究所 地球化学研究部
ニュース発行所 東京都世田谷区深沢2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 一國雅巳・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 49

1970. V. 20

地球化学教育に関するアンケートの集計結果

将来計画委員会 委員長 浜口 博

本会ニュース No. 47 で指摘されているように、本会の会員数は600名を越しているが、20才台の会員の比率はただか10%である。これを日本化学会の会員約33,000名のうち20才台の会員が40%を占めている事情と比較してみると、本会は他の学会と比較して、若い会員の数があまりにも少ないのは明白である。このことは地球化学を志す若い人の絶対数が不足していることの反映である。第三次将来計画委員会としては、地球化学の教育機関の充実を、活動の主眼点におきとあえず日本における地球化学教育の現状を調査することからはじめた。

将来計画委員会は1967年12月6日、および1970年2月7日の2回の会合で、調査の手段として種々の教育機関へ、地球化学教育に関するアンケートを送ることにきめ、その原案と送附先を決定した。発送は93の教育機関(122部門、分校別、学部別、学科別を含む)宛に行なわれ、4月末日までに92%の回答がえられた。

アンケートの作製に当っては、地球化学をどう定義するかが最大の難問であった。地球化学という名前の講義の場合は、問題はないが地球化学に関連のある講義を尋ねる場合、どのようなことが地球化学と判断できるかは委員会では決定することができず、記入者の判断にまかせることにした。なお発送に当っては各機関ごとに中心になって下さる方をきめ、その機関内の調査をとりまとめて下さるようにお骨折りを願った。これらの方々および会員でないにもかかわらず、心よく調査に応じて下さった大勢の方々に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。アンケートの回答を整理した結果は別紙の通りである。

この結果にもとづいて1970年4月3日に将来計画委員会がもたれ意見が交換された。それらの意見を集約すると次のようになる。

イ) 理学部を持つ教育機関ではほとんどの所で地球化学の講義があることになる。

ロ) 工学部関係の調査が不足しているが理学部、教育学部では予期以上に地球化学の講義数が多い。

ハ) 大学院での地球化学関係の教育は学部にくらべてきわめて貧弱である。

ニ) 高校の理科のカリキュラムの指導要綱に地球化学を盛り込む努力をして、高校生に地球化学の存在を知らせる必要がある。

ホ) 地球化学の研究活動を活発に行なっている、教育の機会を持ち得ない人々を教育の場に登用する努力を行なうべきである。

以上のような意見をさらに濃縮すると、大学のしかるべき場所では地球化学の講義の数はかなり多いのに、若い研究者の数の増加が思わしくないのは、大学における地球化学の研究の場数が少ないことに最大の原因がある。一方大学における地球化学研究の場(講座)をふやすことは、地球化学が社会的要請に答える能力を持つていなかによって事実上は左右される。次回の将来計画委員会では、日本の地球化学の研究の動向が従来応用面を軽んずる傾向があったのではないかと反省を含めて環境問題その他の社会的なインパクトに本会がどういう姿勢で立ち向かったらよいかを議題としてとりあげることになった。一方日本の学界において地球化学の地位が必ずしも高くない事情が反映してか、地球化学の研究の場が、特に大学においては減りそうな気配すらある。

日本地球化学会としては、若い地球化学者の育成と、地球化学の教育、研究の既存の場所を確保するという二面的な課題を持っている。現状ですすでに若い層が足りないのは前にものべたとおりであるが、若い力の後押し突き上げがないままに、日本の地球化学が発展するとは到底考えられない。本会の体質の変革(たとえば執行部の大幅な変更)は現状のもとでも不可能ではないので、まずその辺からはじめないと、とても地球化学の“将来”計画どころではなくなってしまうのではなからうか。

なおアンケートの集計結果に関しては、誤りや、調査もれなどがあることと存じます。お気づきの点あるいは御意見を、将来計画委員会(東大理化、浜口 博気付)宛にお寄せ下されば幸いです。

別 紙

I 「地球化学」の講義の有無

有				無
学 部		大 学 院		60
定 期	集 中	定 期	集 中	
31	17	12	6	

- 注 1. 集計は学科又は相当単位について行なった。
2. 定期とは所属スタッフが定期的に講義を行なっているという意味である。
3. 集中講義でも定期的なものがあり、また機関所属スタッフが隔年に講義している所もある。

II 「地球化学」の講義を開いている学生概数 (年平均)

	化学系	地学系	其 他
学 部	700	350	140
大 学 院	52	30	18

III 「地球化学」を内容として含む講義数

		「地球化学」の講義のある所		「地球化学」の講義のない所	
含む割合		有	無	有	無
%	学部	大学院		学部	大学院
0~10	2		18	7	
10~20	5			12	
20~30	9	1		8	2
30~40	4			10	1
40~50	2			3	1
50~60		1		2	2
60~70				1	
70~80	2				
80~90				2	
90~100					3

注 一部門でも関連ある講義を沢山示して下さった所もあり、回答のなかった所もあるので、上記の数字は参考程度のものである。

IV 各機関別の「地球化学」講義の有無の現状

凡例 ◎通年 □集中 ○開講予定
○半年 ■隔年集中 ×なし
●隔年 △関連講義
空欄は回答をいただいていないことを意味する。

大 学	学 科	学 部	大学院
北 大	理, 化	○ △なし	○ (学部に参加)
〃	理, 地	○	
〃	工, 一括	× △	

大 学	学 科	学 部	大学院
北 大	水産, 一括	× △×2	
北海道教育大	札幌分校	○	
〃	函館分校	× △	
〃	釧路分校	× △	
〃	旭川分校	× △	
宝 蘭 工 大	工, 工化	× △	○
弘 前 大			
岩 手 大	教, 化	○ △なし	
東 北 大	理, 化	× △ □不定期	
〃	理, 地	○	
宮城教育大	教, 研施	× △	
秋 田 大	教, 地	○ △×2 ■	
〃	鉱山	○ △	○
秋田工高専	工化	× △なし	
山 形 大	理, 化	◎	
〃	教, 理科	○ △	
福 島 大	教, 地	× △×2	
福 島 医 大			
新 潟 大	理, 化	■	◎
〃	理, 地	× □なし	
富 山 大	教, 理科	× △	
富山工高専	一般化	× △なし	
金 沢 大	理, 化	○ △×2	△×2
〃	理, 地		
福 井 大	教, 地	× △なし	
信 州 大	教, 理科	○	
〃	理, 地	□ △	
〃	理, 化	×	
宇 都 宮 大	教, 化	×	
群 馬 大	工, 応化	×	△
〃	教養, 化	× △	
小山工高専		× △	
茨 城 大	教, 理科	× △×3	
埼 玉 大	理工, 教, 教養, 一括	× △	
千 葉 大	工, 化学系	× △なし	
〃	理, 化	× △	
気象大学校		○ △なし	
横 浜 国 大	教, 化	○ △	
横 浜 市 大	文理, 化	■	
東 大	理, 化	○ △	● ■
〃	理, 地	× △なし	□不定期
〃	理, 地物	×	△
〃	農, 農化	△×2 □不定期	
〃	教養	■ △	
東 京 工 大	理, 化	○ △	◎
東 京 教 育 大	理, 化	○ △なし	△×2
〃	理, 地	× △×2	△
東 京 都 立 大	理, 化	◎ △なし	○

大 学	学 科	学 部	大学院
東京農工大	工, 工化	× △	
東京学芸大	理科, 地	× △	
お茶の水女子大	理, 化+地理	× △なし	
東京水産大	水産	×	△
電 通 大	化	×	
防衛大学校	化	× △	
早 大	理工, 資源+工化	× △×2	
〃	教 地	○	
上 智 大			
東 邦 大	理 化	○ △	
立 正 大	文, 地理	× □不定期	
東 歯 大	化	× △	
東 理 大	理, 化+応化	○	
学 習 院 大	理, 化	○ △	○
立 教 大	理, 化	× △なし	●
東 京 農 大	基礎教, 教職	× △×2	
山 梨 大	教, 化	■ (3年毎) △	
山 梨 県 立 大		×	
東 海 大	理工, 化		
〃	海洋, 海洋化	○	
静 岡 大	理, 化	◎ △なし	
静岡女子短大	一般教	× △	
〃	理, 地球	○×3	○
〃	理, 水質		◎×2, ○
〃	教養	×	
名 工 大	共通講座	×	
愛知教育大	分校		
〃	分校		
名城大	理工, 地	× △	
椋山女学園大		× △なし	
岐 阜 大	教, 化	× △なし	
三 重 大	教, 化	○ △	
奈良教育大	教, 理科	□ △	
奈良女子大			
滋 賀 大	教, 地	● △	

大 学	学 科	学 部	大学院
和 歌 山 大	教, 地	×	
近 畿 大	理工, 地	× △	◎
京 大	理, 化	○	○ (+学部)
〃	理, 地	◎ △×4	
京都教育大	教, 理科	× △×2	
大 阪 大			
大 阪 府 大	教養, 化	×	
大 阪 市 大	理, 地	× △×2	
大 阪 教 育 大	地	× △	
大 阪 工 大	土木工	×	
関西学院大	理, 化	× △	
神 戸 大	理, 化	× △なし	
〃	教, 理科	× △	
甲 南 大	理, 化	× △	
姫 路 工 大			
岡 山 大	理, 地	◎×1.5 ■ △	
広 島 大	理, 地	○ △	
鳥 取 大	工, 工化	× △なし	
島 根 大	文理		
山 口 大	文理, 化	× △×2	
〃	工, 資源工	× △	
香 川 大	教, 化	○ ■	
愛 媛 大	農化	○ △なし	
徳 島 大	教, 地		
高 知 大	文理, 地	■ △	
〃	理, 化	○	
〃	理, 地	○ △×4	
福 岡 教 育 大	理,	○ △なし	
〃	教, 理科	× △	
佐 賀 大	理工, 化	○ △なし	
大 分 大	教, 化	● △	
熊 本 大			
長 崎 大	教, 教養, 地	× △	
都 城 工 高 専		× △	
鹿 児 島 大	理, 化	□ △なし	
〃	理, 地	× △	
琉 球 大	理工, 化	□不定期 △	

1970 年 地 球 化 学 討 論 会

共催 日本化学会, 日本地球化学会

日 時 11月22日(日)~25日(水)
会 場 東海大学海洋学部
内 容 課題討論および一般討論
課題討論
1. コロイド様物質の地球化学的役割

2. 地殻およびマンタルの化学

講演申込締切 7月20日(月) 必着

200 字程度の講演内容の概略をつけて、下記書式により申込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変

更することがあります。講演，討論時間は課題討論は 30 分以内および一般討論は 20 分以内です。講演はスライド (35 mm) 使用に限ります。

講演要旨原稿締切 9 月 21 日 (月) 必着

講演申し込みが受理された場合には，規定の原稿用紙をお送りしますから，黒インクで清書して下記宛お送り下さい。要旨の字数は原則として課題討論 2,600 字，一般討論 1,200 字ですが，4,000 字以内なら長くても結構です。

参加登録料 200 円

本討論会は参加登録制を実施します。ただし学生および予約申込者は登録料を免除します。

講演要旨集頒価 1,100 円 (送料共)

予約申込締切 8 月 21 日 (月)

講演要旨集は印刷部数を限定しますので，参加ご希望の方は講演希望の有無にかかわらず下記書式で参加申し込みをして下さい。予約者には要旨集を予約金引換で，10 月中にお送りする予定です。

総 会 11 月 23 日 (月)

一般討論終了後，午後 4 時 30 分から約 1 時間開催します。

懇 親 会

11 月 23 日 (月) 午後 6 時から，日本平観光ホテルにて行ないます。なお会場への往復はバスを準備します。会費 1,000 円

エキスカーション

日時：11 月 25 日 (水)，午前 10 時より午後 3 時まで東海大学丸 II 世にて，清水，御前崎往復の試乗航海を行ないます。

費用：無料。ただし，昼食は会場にて用意する弁当を持参願います。

エキスカーション参加申込締切 9 月 21 日 (月)

参加人員が少ない場合には中止します。

宿 舎

開催期間中の宿舍のお世話は東海大学海洋学部にては致しません。ただし，7 月 20 日 (月) までに下記の清水市旅館組合に各自直接申し込み下さい。申し込みされた方には同旅館組合から詳細については御連絡致します。

申込先 静岡県清水市江尻大和町 97 (☎424)
三園旅館内 清水市旅館組合
電話 (0543) 66—5015

申込書，要旨原稿送付先

静岡県清水市折戸 1,000 (☎424)
東海大学海洋学部海洋化学教室 岡部史郎
電話 (0543) 34—0411 (内線 250)

講演申込書書式 (ハガキ大) 7 月 20 日締切

1970年度 地球化学討論会講演申込書			
受付番号*	講演番号*		
申込者氏名			
連絡先	郵便番号	電話	
演 題			
発表者氏名 および所属	(ふりがな，講演者に○印をつけて下さい)		
講演希望部門	決定部門*		
講演希望時間	決定時間*		
予定要旨字数	1,200 字	2,600 字	4,000 字

* は当方で記入します。予定字数にしたがって原稿用紙をお送りします。

参加申込書書式 (ハガキ大) 9 月 21 日締切り

1970年度 地球化学討論会参加申込書			
受付番号*			
氏 名	所 属		
連絡先	郵便番号	電話	
懇親会	出席	欠席	
エキスカーション	参加	不参加	
送 金 額	予約申込料 (1,100円) 懇親会参加費 (1,000円) 合計 円		
送金方法	現金 為 替		

* は当方で記入します。不要の文字は消して下さい。

学会事務所移転のお知らせ

この度，日本地球化学会の事務所が下記に移転しました。

東京都杉並区高円寺北 4—35—8
気象研究所 地球化学研究部内
電話 (03) 337—1111 内線 75

御送金は下記のいずれかにおねがいします。

- 北海道拓殖銀行荻窪支店
普通預金口座 日本地球化学会
- 郵便振替口座
口座番号 東京 38679 日本地球化学会
- 指定郵便局
東京都杉並区北馬橋郵便局

学会事務所 東京都杉並区高円寺北 4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
ニ ュ ー ス 東京都世田谷区深沢 2-1-1
発 行 所 東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 半谷高久・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 50

1970. IX. 10

1970年度地球化学討論会

主 催 日本地球化学会・日本化学会

会 期 11 月 22 日 (日)～11 月 25 日 (水)

会 場 東海大学海洋学部

日 程 表

日	時	8:30	9:00	12:00	13:00	16:00	18:00	会 場
22日(日)			課 題 討 論 I 課題討論 II	休 憩	課 題 討 論 II			
23日(月)	受		一 般 討 論	休憩	一 般 討 論	総 会	懇親会*	*日本平観光ホテル
24日(火)	付		一 般 討 論	休憩	一 般 討 論			
25日(水)				エキスカーション (東海大学丸二世)				清水←→御前崎

第 1 日 11 月 22 日 (日) A 会場

課題討論 I. コロイド様物質の地球化学的役割

(コンビーナ：岡部史郎)

—(9:00～13:00)—

座長 北 野 康

22 I 01 深層水中で分解されるセストンの元素組成

(北大水産) 角皆静男

22 I 02 懸濁物中の珪酸化合物の溶解性について—珪藻
プランクトンを中心にして

(東水大) 鎌谷明善

22 I 03 海中懸濁物の生産と消費

(北大水産) 西沢 敏

座長 細 川 巖

22 I 04 海水中のアルミニウムについて (その 3)

(近畿大理工・近畿大原研*・京大化研**)

西川泰治，°平木敬三，平山 宏，

合田四郎*，重松恒信**

22 I 05 駿河湾における浮遊懸濁物の無機化学的研究
(東海大海洋) °豊田重聖，菊地潔，
石川勝，岡部史郎

22 I 06 海洋のマンガン質物質の放射化学的研究
(金沢大理) °野村 保，大橋三樹子，
中西 孝，阪上正信

22 I 07 ²¹⁰Pb から推定される海洋粒状物質の挙動
(北大水産) 角皆静男，°野崎義行
座長 重 松 恒 信

22 I 08 筑後川河口水域における溶存シリカおよびアル
ミニウムなどの挙動について
(福岡教大) 細川 巖，°大島文男，
坂田純子

22 I 09 2, 3 のコロイド質鉱物の生成環境とその潜在的
性質の変化

(東工大地学) 小坂文子

- 22 I 10 CaCO_3 の同質多像形成 におよぼす微量金属
元素の影響, —Neucleation 時の CaCO_3 の
性質—
(名大理水研, 琉球大教養*)
°北野 康, 金森暢子,
渡久山章*

C 会 場

課題討論 II. 地殻およびマントルの化学

- (コンビーナ: 桂 敬)
—(9:00~11:00)—
座長 本 田 雅 健
- 22II01 微量親石元素からみた月の石の発展過程と地球
との比較 (その1) 希土類元素の分配係数
(東理大理) 増田彰正, °中村 昇
- 22II02 微量親石元素からみた月の石の発展過程と地球
との比較 (その2) ユーロピウムの異状性
(東理大理) °増田彰正, 中村 昇
座長 木 越 邦 彦
- 22II03 ^{238}U 非平衡系および鉱物生成年代からみた火山
岩について
(京大教養) 西村 進
- 22II04 岩石中における ^{238}U — ^{230}Th の放射平衡につい
て
(東教大, 気象研*) 三宅泰雄,
杉村行勇*, °平尾良光
- 22II05 Mg_2SiO_4 — Fe_2SiO_4 — SiO_2 , 3 成分系の高圧下
における相平衡とその岩石学的意義
(岡山大温研) 松本 隆
—(14:00~16:00)—
座長 増 田 彰 正
- 22II06 塩化水素中での熔融火山岩からのアルカリ金属
化合物の揮発
(秋田大鉱・東工大理*) °岩崎文嗣,
桂 敬*
- 22II07 海山玄武岩の K/Rb, ($\text{Sr}^{87}/\text{Sr}^{86}$)
(東大理・東洋大*) 小嶋 稔, 座主繁男,
上野直子*
座長 桂 敬
- 22II08 地向斜玄武岩 (1) その地球科学的意義
(名大理) °水谷伸治郎, 杉崎隆一,
田中 剛, 小穴進也
- 22II09 地向斜玄武岩 (2) その主要化学成分
(名大理) °杉崎隆一, 田中 剛
- 22II10 地向斜玄武岩 (3) その微量成分

- (地調・名大理*) °服部 仁, 杉崎隆一*,
田中 剛*
- 22II11 地向斜玄武岩 (4) その希土類元素パターン
(名大理・東理大*) °田中 剛, 増田彰正*,
杉崎隆一

第 2 日 11 月 23 日 (月) A 会場

- (9:00~12:00)—
座長 杉 浦 吉 雄
- 23A01 大洗研究所沿岸海域の海水と海底土中の ^{137}Cs
について
(原研) 亀田和久
- 23A02 沿岸水域における窒素代謝
(名大理水研) °三田村緒佐武,
西条八束
- 23A03 深海水中のヨウ素
(北大水産) 角皆静男
座長 角 皆 静 男
- 23A04 北太平洋表面水の炭酸ガス分圧の分布
(東教大・気象研*) 三宅泰雄, °杉村行勇*
- 23A05 表面海水中の溶存有機物の分解速度
(都立大理) 小倉紀雄
座長 西 川 泰 治
- 23A06 クロロフィル濃度極大層の出現機構に関する,
2, 3 の考察
(名大理水研) °柳 勝美, 半田暢彦
- 23A07 海洋における溶存酸素の $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ の鉛直分布に
ついて
(東教大) °坂田 誠, 三宅泰雄
座長 堀 部 純 男
- 23A08 太平洋海水のトリウム同位体含量
(東教大・気象研*) 三宅泰雄,
杉村行勇*, 安島忠秀
- 23A09 海水中の $^{228}\text{Th}/^{232}\text{Th}$ 比の過大値について
(気象研・東教大*) °猿橋勝子, 杉村行勇,
三宅泰雄*, 安島忠秀*
—(13:00~16:00)—
座長 桑 本 融
- 23A10 海水中のセリウムについて
(近畿大理工・京大化研*) 平木敬三,
°辻本善守, 太田幸次, 西川泰治,
重松恒信*
- 23A11 海水中のランタン, ユーロピウム, 銅, マンガ
ンについて
(近畿大理工・京大化研*) °合田四郎,

- 西川泰治, 重松恒信*, 田伏正之*
- 23A12 ホウ素の海水からの蒸発について
(北大水産) 西村雅吉, 中谷 周, °田中一彦
座長 阪 上 正 信
- 23A13 海水中における ^{238}U — ^{234}Th の非平衡
(東教大・気象研*) 三宅泰雄, 杉村行勇*,
°松本英二
- 23A14 海水中のウラン濃度およびウラン同位体比
(東教大・気象研*) 三宅泰雄, 杉村行勇*,
°前田 勝
- 23A15 赤道潜流の重水素濃度
(東大海洋研) °堀部純男, 遠藤圭子
座長 西 村 進
- 23A16 火成岩のアパタイト中のウラン, トリウム含有
量
(学習院大理) °手塚 睦, 木越邦彦
- 23A17 火砕流構成鉱物中の U, Th.
(学習院大理) °福岡孝昭, 木越邦彦

B 会 場

- (9:00~12:00)—
座長 本 島 公 司
- 23B01 薩摩硫黄島の火山ガスおよび火山岩のモリブデ
ン含量
(東工大理) °吉田 稔, 小沢竹二郎
- 23B02 火山ガス中の重金属元素の挙動について
(名大理) °浜砂武聖, 水谷義彦
- 23B03 火山性ガスの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$, D/H
(名大理・東大海洋研*)
中井信之, 小穴進也, °江場弘樹,
堀部純男*
- 座長 綿 拔 邦 彦
- 23B04 箱根火山の熱水変質作用における炭酸ガスの分
圧と pH
(神奈川県温研) °鈴木孝雄, 平野富雄,
田嶋縫子, 大木靖衛
- 23B05 明神礁最近の活動とこれに伴う噴出物の化学成
分
(東工大地学) 小坂丈予, 大平洋子
- 23B06 火山岩の加熱による塩素と臭素の蒸発
(東工大理) 高橋和義
座長 水 谷 伸治郎
- 23B07 種々の溶液における微斜長石の分解 (第2報)
塩酸と硫酸の相違
(名工大) 神谷 宏, °功刀正仁, 小林俊光

- 23B08 草津白根山東麓に産する 2, 3 の鉱物の 特 異 な
生成状況について
(上智大・東工大地学*)
堀口 隆, 野村昭之助, 南 英一,
小坂丈予*, 平林順一*
- 23B09 石灰華の化学組成
(都立大理) 一国雅巳
—(13:00~16:00)—
座長 小 沢 竹二郎
- 23B10 鳴子温泉の化学的研究
(東北学院大) °渡辺淳夫, 斎藤晋一
- 23B11 本邦温泉の平均的化学組成の決定
(東工大理・東邦大理*)
°山谷和久, 岩崎岩次*
座長 小 坂 丈 予
- 23B12 別府温泉中のフッ素
(九大温研) 野田徹郎
- 23B13 川原毛温泉産の含鉛重晶石
(東大教養) °高野穆一郎, 綿拔邦彦
- 23B14 鉄質沈殿物中のバナジウム
(都立大理) 荒木 匡
座長 西 村 雅 吉
- 23B15 熱水における ZnS の相転移
(名大理) °清棲保弘, 中井信之
- 23B16 熱水溶液中における硫化鉱物の安定性
(名大理) °中井信之, 清棲保弘,
井原 康

C 会 場

- (9:00~12:00)—
座長 赤 岩 英 夫
- 23C01 地球化学的標準試料 JG—1, JB—1 の化学成分
(地調) °安藤 厚, 倉沢 一,
山田貞子, 竹田栄蔵
- 23C02 中国地方頁岩の化学組成, およびバナジウム,
ニッケル, クロム含有量
(香川大教育) 稲積章生
座長 岩 崎 文 嗣
- 23C03 堆積岩の堆積環境と指示元素 [I] 堆積岩中の
ガリウム含量について
(群馬大工) 赤岩英夫, 田島栄作,
°磯貝輝雄
- 23C04 二, 三の金属鉱床における水銀などの分布につ
いて
(地調) °加藤甲壬, 岸本文男

- 23C05 高知県白滝鉱山の硫化鉱物の微量成分元素
(地調) 伊藤司郎
座長 鎌田政明
- 23C06 土畑鉱山周辺地域の土壌および岩石中の微量成分と鉱床との関連性について
(地調) 東野徳夫
- 23C07 土畑鉱山周辺地域の植物中の微量成分について
(地調) °竹田栄蔵, 東野徳夫
座長 室住正也
- 23C08 ヘリウムの分布と根源岩について
(地調) 本島公司, °安藤直行, 牧真一
- 23C09 酸分解によって発生する石灰岩中の炭化水素ガスについて(2)
(地調) °藤貫正, 米谷宏, 和田欣也
- 23C10 四万十層に関する炭化水素の地球化学(例, 宇和島および宮崎市付近)
(地調) °牧真一, 米谷宏, 村田富子
—(13:00~16:00)—
座長 松尾禎士
- 23C11 黒鉱々床にともなう石膏の結晶水の水素および酸素同位体比について
(岡山大温研・東大海洋研*)
°松葉谷治, 酒井均, 堀部純男*
- 23C12 新礁の重晶石塊の $\delta s. \delta o$ 値について
(岡山大温研) 酒井均
座長 小嶋 稔
- 23C13 黒鉱の鉛同位体存在比
(東大地震研) 佐藤和郎
- 23C14 日本のペグマタイトを中心とした長石中の鉛の同位体比
(東大理) °宮崎章, 斎藤信房
座長 佐藤和郎
- 23C15 火成岩に伴う炭酸塩鉱物の $^{13}C/^{12}C$ 比について
(名大理) °小穴進也, 大崎進
- 23C16 北海道浦河地方の石灰岩のカルシウム同位体組成
(室蘭工大・地調*) 室住正世,
°重川守, 番場猛夫*
- 23C17 含水硅酸塩鉱物—水間の水素同位体の分配
(東教大・カリフォルニア工大)
鈴置哲郎, Samuel Epstein
- 第3日 11月24日(火) A会場
—(9:00~12:00)—
座長 寺田喜久雄

- 24A01 天然水中における水和酸化鉄の化学的性質
(名大理水研) °古川征弘, 金森 悟,
北野 康
- 24A02 銅の二酸化マンガン沈殿への共同沈殿
(京大理) 藤永太一郎, °桑本 融
- 24A03 海底土中の ^{26}Al と ^{10}Be
(東大核研・都立大*・農工大**)
°田中重男, 坂本 浩, 井上照夫,
高木仁三郎*, 榎本道子**
座長 小山忠四郎
- 24A04 堆積物フミン酸の分子量分布
(都立大理) 石渡良志
- 24A05 堆積泥中の窒素の挙動, その I; 窒素の含有量とその同位体比の分析法
(東教大) °坂田きみ子, 松尾禎士
座長 田中重男
- 24A06 現世水盆におけるウランの堆積地球化学的問題
(地調) °水野篤行, 望月常一
- 24A07 日本海堆積物中のレニウムの分布
(金沢大理) °寺田喜久雄, 山中真吾
座長 水野篤行
- 24A08 フィリピン海深海底土の Io/Th 法による堆積速度の研究
(東教大・気象研*) 三宅泰雄, °杉村行勇*
- 24A09 海底堆積物の堆積速度と球形物体の発見頻度
(学習院大理) °満田 伯, 木越邦彦
- 24A10 天然水の水質を通しての風化される岩石の量と生産される粘土鉱物の量の推定
(名大理水研) °北野 康,
吉岡小夜子, 加藤喜久雄
—(13:00~16:00)—
座長 酒井 均
- 24A11 月の岩石の化学組成
(東大理・東工大理*・日本女子大理**)
°原村 寛, 桂 敬*, 蟻川芳子**
座長 倉 沢 一
- 24A12 月の岩石と酸素分圧
(東工大理) 桂 敬
- 24A13 地球の成立に対する揮発性成分の役割
(東教大) 松尾禎士
座長 倉 沢 一
- 24A14 大洋底よりドレッジされた岩石の変質とその K—Ar 年代への影響
(東大理) 兼岡一郎
- 24A15 化石骨中のウランおよび, ^{230}Th , ^{231}Pa とその年代学

- (金沢大理) °吉岡満夫, 阪上正信
- 24A16 α 反跳を受けた ^{230}Th , ^{234}U による火成岩の年代測定
(学習院大理) 木越邦彦
座長 神谷 宏
- 24A17 佐度島小木玄武岩中の “Carbonate dykes” について
(名大理) °大崎進, 小穴進也
- 24A18 緑色凝灰岩中の緑色鉱物について
(山形大理) °入江敏勝, 田中一夫
- 24A19 インド, デカン高原玄武岩調査報告(序報)
(地調・東大理*・山形大理**)
°倉沢 一, 荒牧重雄*, 今田 正**, 小嶋稔**,
木下 肇*, 河野 長*, 清水孚道*, 兼岡一郎*,
山川 稔*
- B 会場
—(9:00~12:00)—
座長 森田良美
- 24B01 水中 P-Coumaric acid のガスクロマトグラフィーによる定量
(都立大理) °片瀬隆雄, 半谷高久
- 24B02 農業による大気汚染(3)
(愛媛大農) °立川 涼, 脇本忠明
- 24B03 降水中の硫酸について
(成蹊小) 竹内丑雄
座長 立川 涼
- 24B04 筑後川水系の水質について
(福岡教大) °細川 巖, 大島文男
- 24B05 天然水中の亜鉛およびカドミウムの分布
(鹿児島大理・鹿児島大教*) °鎌田政明
大西富雄*, 坂元隼雄
- 24B06 河川水の水質変動と流出機構に関する研究
空知川, 金山ダム流域について
(北大工) °那須義和, 東郷昭彦, 森島 彰,
座長 那須義和
- 24B07 宮都官市新川の水質汚濁
(宮都官大教育) 平山光衛
- 24B08 いたち川水系の汚濁(週間及び日周変動)
(富山高専) °布村啓一, 寺田龍郎
- 24B09 鉱業活動による十和田湖の水質変化
(東水大) 森田良美
—(13:00~16:00)—
座長 金 森 悟
- 24B10 東京湾底泥中の n-パラフィン—油汚染の指標

- として—
(都立大理) °小椋和子, 高田利彦,
半谷高久
- 24B11 水俣湾の海水および底泥の水銀
(都立大理) 半谷高久
座長 杉崎隆一
- 24B12 那覇3号天然ガス井のコアガスの垂直分布
(地調) °永田松三, 粕 武
- 24B13 沖縄中部ガス田の堆積地球化学と地質構造
(地調) °本島公司, 比留川貴
座長 竹田 栄蔵
- 24B14 松代地域の地下水および天然ガスについて
(地調・防災センター*) °比留川貴
永田松三, 高橋 博*
- 24B15 松代地域における地下水の地球化学的研究(II)
—ハロゲン元素について—
(名大理・京大防災研*) 北野 康,
°吉岡龍馬*, 奥田節夫*
- 24B16 宮古島の地下水および溶存ガスについて
(地調) 安藤直行, 本島公司, °阿部喜久男,
大場信雄, 竹内三郎
座長 中井 信之
- 24B17 浜松地域塩水地下水の化学成分
(地調) 池田喜代治
- 24B18 那覇3号天然ガス井の地下水の地球化学
(地調) °粕 武, 永田松三
- 24B19 高松市街部の地下水水質, 特に深戸水質について
(香川大教育) 糸山東一
- C 会場
—(9:00~12:00)—
座長 杉村行勇
- 24C01 中海, 宍道湖底下第四紀層中の間隙水組成(予報)
(地調) °望月常一, 水野篤行
- 24C02 日光湯ノ湖における溶存有機物の現存量と収支
(都立大理) °水谷達夫, 大槻 晃, 半谷高久
- 24C03 湯ノ湖における尿素的現存量について
(都立大理) °佐藤泰哲, 半谷高久
座長 半田 暢彦
- 24C04 酸性湖における有機物の生産と分解
(名大理水研) °佐竹研一, 西条八東
- 24C05 琵琶湖の水質
(京大理) °藤永太一郎, 小山睦夫

- 24C06 宋道湖, 中海堆積物中のアミノ酸, 炭水化物について
(地調) °渡辺美南子, 水野篤行
座長 藤 永 太一郎
- 24C07 天然水における遊離アミノ酸の化学的研究
(名大理水研) 富野孝生
- 24C08 湖底堆積物の多糖類の化学的性質
(名大理水研) °水野恭佑, 半田暢彦
- 24C09 珪藻類の多糖類について
(名大理水研) 半田暢彦
—(13:00~16:00)—
座長 西 条 八 東
- 24C10 湖底堆積物中の縮合芳香族化合物に関する研究
(名大理水研) 佐藤 修, °松永捷司,
小山忠四郎
- 24C11 湖底堆積物中のステロイドに関する研究
(名大理水研) °西村弥亜, 小山忠四郎
座長 入 江 敏 勝
- 24C12 珪酸イオンと酸素イオン間の平衡 (1)
(東工大理) 桂 敬, °広田和士
- 24C13 地殻中と海水中の微量元素の相関性
(京大理) °藤永太一郎, 桑本 融
- 24C14 固一液相間の微量元素の分配 1. バナジウムの
磁鉄鉱への分配
(東工大理) °北山憲三, 桂 敬
座長 一 国 雅 巳
- 24C15 部分熔融実験における希土類元素の分配係数
(東理大理・東大理*) 増田彰正, 久城育夫*
°中村 昇
- 24C16 $\text{Fe}_3\text{O}_4 \sim \text{FeV}_2\text{O}_4$ 連続固溶体の熱力学的考察
(東工大理) °脇原将孝, 桂 敬
- 24C17 地殻およびマントルの化学
吉岡亀太
- 懇 親 会 11月23日(月)午後6時から
日本平観光ホテル
会場への往復はバスを準備します

総 会 11月23日(月)午後4時30分
から約1時間

エキスカージョン 11月25日(水)午前10時から午後3時まで東海大学丸II世にて清水御前崎往復の試乗航海を行います。費用: 無料
参加申込締切 9月21日(月)

参加登録・講演要旨集申込締切

9月21日(月)までに予約金1,100円(要旨集, 同送料共)を添えてお申し込み下さい。

参加予約申込先

〒424 静岡県清水市折戸1000
東海大学海洋学部海洋化学教室 岡部史郎
(電話 0543) 34-0411)

宿舍の予約

希望者は下記あて直接お問い合わせ下さい。詳細については旅館組合よりご連絡します。
清水市旅館組合: 〒424 静岡県清水市江尻大和町97 三園旅館内 (電話 0543) 66-5015)

交 通

- ①新幹線静岡駅で国鉄に乗り換えて清水駅に下車, 静鉄バス三保行停留所(駅前通りの信号付交差点を左へ約50m)から三保センター, 又は三保車庫前行に乗車, 海員学校東海大学前。バス所要時間30分, タクシーは清水駅前から乗車約15分(料金380円)
- ②東海道線清水駅で下車して静鉄バスに乗車。

学会事務所 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
ニ ュ ー ス 東京都市田谷区深沢2-1-1
発 行 所 東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 半谷高久・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 51

1970. XI. 25

IAGC シンポジウム・バンケット(9月11日夜)での 英国プリマス研究所クーパー博士の挨拶

菅 原 健

本夕何か話しをとの御要請ありがとうございます。
国外からの参加者を代表して, まず主催の日本の方々
に申し上げます。

近代地球化学の形成に大いに貢献したのは V. M. Goldschmidt でありましたが, それに同調したのがフィンランドの同僚達で, これらの人々は地球, 大気, 水, それに宇宙空間を一つにして眺め, 物理学と物理化学を基盤として地球化学をうちたてるという考えであったのでした。その後, この高邁な Goldschmidt の精神はその後幾年かの経過の間に見失われたかに見えました。

私は, ヘルシンキやトロントでの会議に足を運んだが, そこでは地球化学者の国際協会の結成が強く叫ばれながらその討議は, 岩石の化学の立場からのみなされたのであって, 自分のような者は全く疎外されたのであった。失望した私は, 彼等の列から去らなければならなかったのでした。それは私だけではなかった。海洋化学者, 陸水化学者, 科学水文学者は各自それぞれの道を歩まねばならなかった。下層大気化学者は相応わしい力の欠けた気象学者の手にゆだねられてしまい又もし自分の記憶に誤りが無いとすれば上層大気化学者達は国際地震学協会の中にその宿を求めざるをえなかったのである。

こうした分割状態は, 最近十年位前まで続いていたのでありました。この欠陥を改めようとしたものは日本以外にもありました。だが地球化学の真の姿であるべき統一(unity)と, 変化(variety)の両面を見つめつけてきたのは今夕の主人役日本人であったのである。彼等の見方は正に輝く対照を一本の筋に貫いた, 一つの交響

楽を作り出す偉大なる作曲家のそれであったのです。今週を通じてきた楽章の主題曲は水地球化学と生物地球化学といういわば木管楽器にのせたそれでした。それと共にある部分には, 絃も, プラスも, 打楽器をも加えることを忘れず, それは調和をもってその間に挿入されたのでありました。

作曲家のこの行き方に対してわれわれ国外から参加した者は, 深く深く感謝を表するものであります。

われわれは, ここに二人の人に感謝を捧げたい。その一人は国際地球化学・宇宙化学協会のセクレターであり一人の日本人である菅原健教授, 他の一人, その人は菅原とは別の面で素晴らしい手腕を発揮された現地の準備組織委員会の委員長としての三宅泰雄教授である。だが, 偉大なる将軍達の勝利は, よき兵士達なくして勝ちとれるものではない。

多くの人達, そのある人々は前から私が知っていた, 又ある人々は私に未知の人々であったが, それらの人々は, この会の成功をもたらすため全ての努力をされたのであった。

諸君, 私のこの感謝と感嘆のことばに拍手を以ってお加わりを願いたい。今われわれにできることは唯一つこれです。(拍手)

(バンケット席上でのクーパー博士の挨拶はニュースの資料として適当と考え御紹介致します。アメリカ人に見られない英語の味は, 私の拙ない反訳では伝えるに由ないが学問に対する彼の毅然たる態度と今回のシンポジウムについての同情的印象の一部をお伝えできれば満足であります。1970. 11. 6)

研究船「淡青丸」「白鳳丸」の共同利用の申込みについて

東大海洋研，化学関係世話人 堀 部 純 男

昭和46年度の研究船の共同利用に関する書類が，10月中旬に各関係機関に研究所より発送される予定です。下記にその大要をお知らせ申し上げます。さらに詳細な情報を必要とされる方は，直接御連絡下されば幸いです。

共同利用申込み期限：昭和45年12月10日

申込み方法：申込用紙は下記へ御連絡下さればお送りすることになっています。

164 東京都中野区南台 1—15
東大海洋研究所 Tel 376—1251
共同利用掛

なお，淡青丸の申込み用紙（様式）が昭和45年度より変わりましたので，古い用紙は利用できません。

採否の決定：昭和46年2月上旬開催される共同利用施設運営委員会で決定されます。

“白鳳丸の運航計画について”

昭和45年3月に開かれましたシンポジウムの結果に基づいて，昭和46年度の運航計画および47，48年度の運航計画の大綱が，8月15日開催の研究所協議会*・共同利用施設運営委員会*合同会議において，下記のように決定されました。

昭和46年度白鳳丸運航計画			
海 域	期 間	日 数（日）	主な関連分野
東支那海	5.7～6.3	28	生物
親潮・黒潮	6.15～7.26	42	物理・化学・生物
大和堆	8.10～9.2	24	水産
南太平洋	11.4～47年	2.25 114	化学

昭和47年度 白鳳丸運航計画大綱			
海 域	期 間	日 数	主な関連分野
東南アジア	5.6～7.29	85	生物
日本近海	10.25～12.16	53	地物
親潮・黒潮	48年1.10～2.6	28	物理・化学・生物
九州南西	2.16～3.25	38	水産

昭和48年度白鳳丸運航計画大綱			
海 域	期 間	日 数	主な関連分野
九州南方	5.8～6.4	28	物理
西太平洋	7.3～9.25	85	地物
九州南西	11.27～12.24	28	水産
亜熱帯反流	49年1.17～3.23	66	物理

“淡青丸”の運航計画について

昭和46年度も前年度ととくに変化はありません。したがって，あらかじめ航海する海域も決定してありません。最近の傾向として，一回の航海でも，ある程度の成果が得られるようにするために，1航海の日数が長く，また単独の（各研究者グループの）航海が多くなる傾向があります。

なお協議会・共同利用施設運営委員会の委員氏名は下記の通りです。

* 東京大学海洋研究所協議会委員

学外	学内
磯野 謙治（名 大）	新崎 盛敏（農）
市村 俊英（東教大）	金沢 武（工）
金谷 太郎（東北大）	吉田 耕造（理）
川上喜代四（水路部）	久保 亮五（理）
木羽 敏泰（金沢大）	川田信一郎（農）
国司 秀明（京 大）	森本 良平（震研）
斉藤 行正（神戸山手女短大）	藤吉日出男（事）
平野 敏行（水産庁）	西脇 昌治（研）
水江 一弘（長崎大）	丸茂 隆三（研）

* 東京大学海洋研究所共同利用施設運営委員会委員

所外	所内
金谷 太郎（東北大）	内田 一郎
西条 八束（名 大）	寺本 俊彦
菅原 健	西脇 昌治
南雲昭三郎（震 研）	堀部 純男
吉田 耕造（理）	丸茂 隆三

昭和46年度白鳳丸研究航海

概 要

1 東支那海

「浮游性藍藻 Trichodesmium を中心とする生態系に関する研究」

Trichodesmium は，暖海の基礎生産者としてきわめて重要な役割を果している。本研究は，東支那海およびその近海において，Trichodesmium を中心とする生態系について，分類，分布，生活史，生産構造，物質循環，付着細菌，環境要因等を究明することを主目的とする。

2 親潮，黒潮

「亜寒帯水域，亜熱帯水域における海水の運動と物質循環に関する研究」

日本近海の 44°N，150°E および 25°N，150°E 附近を代表点にえらんで，それらの点附近における海水の流速と海水特性の分布を測定し，海水の運動と物質循環を調査研究する。

時期による違い，或は季節による違いを見るために，46年度の夏期および47年度の冬期の2回測定を

実施する。

3 大和堆

「大和堆近傍の漁場形成機構に関する研究」

日本海における重要な漁場たる大和堆を例にとつて，従来よりも，もっと連続的，且つミクロな時空間無機環境測定を行う，生物的環境についても，表層から底棲までの生物を量的に調べる。この両環境の調査と漁業調査とを組合せて，漁業生物生態と環境要因との関連性について数量的解析の端緒が拓かれるものと期待される。

4 南太平洋

「太平洋海水の化学的特性の研究」

太平洋の海水の化学的特性を把握し，太平洋全体の海水の循環，混合の研究に対する基礎的データを求めることを目的としている。海域としては，
146°W経線上 17°N—66°S
100°又は98°W経線上 10°N—66°S

これらの経度線上において，各層採水による各層水の採取，および数地点での大量採水，採泥を予定している。

評 議 員 会 報 告

○ 2/14/70 学生会館本郷分館

出席評議員の互選により，会長に三宅評議員，副会長に浜口評議員を選出した。役員として庶務担当：半谷・猿橋，会計担当：北野・杉浦，編集担当：小穴，行事担当：桂の各評議員を選出した。幹事に杉村・石渡・水谷の各氏，監事は野口氏に委嘱した。

評議員に岡部・猿橋・杉浦の各氏を追加指名した。

評議員の選出方法について検討することになり会則検討委員会（浜口・梅本・阪上・松尾・一国の各評議員で構成）の活動を再開することにした。

○ 4/4/70 気象庁

IAGCシンポジウム第1回組織委員会が3/26に開かれ，委員長に三宅氏が選出され，委員会の運営要項を決めた。

6月例会は柴田賢，木和茂行両氏に依頼することにした。

今年度人件費の一部を評議員会会議費に費目変更することにした。

○ 6/13/70 学生会館本郷分館

1971年度討論会を1971年10月に東京で開催し，世話を東京教育大と気象研が共同で行うことにした。

会則改正小委員会より3つの会則案の提案と趣旨説明があり討論した。委員会ですらに検討することにした。

○ 10/17/70 名古屋名鉄グランドホテル

IAGC国際シンポジウムは20カ国から360名の参加者があった。募金は約800万円集まった。

今回の国際地球化学会議が1971年7月にモスクワで開かれる。

出版費の値上りのため約50万円の赤字がでる見込みなので，会費値上げを考えることにした。

評議員の選出方法などの会則改正案について討論した。今回の評議員会で検討し，改正案がまとまれば今年度の総会に提出することにした。

1971年度討論会の討論課題の案：①地球化学からみた環境汚染 ②同位体火山学。

お知らせ

第8回・理工学における同位元素研究発表会

48学・協会（本学会も参加）の共同主催で、標記の研究発表会が開催されます。発表希望の方は、所定の申込書により申し込んで下さい。

会 期： 昭和46年4月15日（木）～17日（土）

会 場： 国立教育会館

発表申込締切： 昭和46年1月30日（土）

申込書請求先：

113 東京都文京区本駒込二丁目28番45

日本放射性同位元素協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会。 Tel
(03) 946局 7111番

新 会 員

(1969.12.16～1970.10.16)

(氏名)	(勤務先)	(卒業学校)
伊藤 裕一	室蘭工大, 化工	
荒牧 重雄	東大農研	東大理 (1953)
馬淵 久夫	東大理化	東大理 (1953)
鈴木 芳美	早大大学院	早大理工 (1969)
武司 秀夫	阪大教養	東大理 (1944)
兼岡 一郎	東大理地物	東大理 (1970) *
早川 博信	福岡県衛生研	名大理
高井 雄	荏原インフィルコ	名大理 (1956)

喜種 寿人	秋田大鉱山	
増田 康之	阪大教養	京大理 (1970) **
土永 恒弥	大阪市立衛生研	大阪工大 (1964)
重川 守	室蘭工大大学院	室蘭工大 (1968)
高橋 輝明	北大理地質	北大理 (1969)
藤田 晃	甲南大理・地学	京大理 (1955)
吉岡小夜子	名大理大学院	
永田 松三	地調	小野田実業 (1940)
岩越 正文	名大理	
田中 耕平	早大大学院	
堤 克彦	名大理大学院	
小池 勲夫	東大海洋研大学院	
太田 一也	九大理島原火山温研	九大理 (1958)
小嶋 卓	名大理大学院	
坂田きみ子	東教大理大学院	
蟹沢 聰央	東北大教養	東北大理 (1959)
長屋 裕	放医研	東大農 (1954)
加藤 敬香	大阪市立衛生研	阪大 (1951)
G. Dessau	Institute Geologia Univ.	

Univ. Pisa and Rome
(1929)

飯山 敏道 Centre de Recherche sur la Synthèse
et la Chimie des Minéraux, C.N.R.S.
France. 東大理 (1951)

(カッコ内は大学修了年次, * 大学院博士課程, ** 修士課程修了年次)

退会者 (70/4/16) 岡好良, (70/4/16) 田中昌也,
(70/5/30) 北原順一

学会事務所 東京都杉並区高円寺北 4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
ニュース 東京都世田谷区深沢 2-1-1
発行所 東京都立大学理学部化学教室
(編集担当) 半谷高久・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 52

1970. XII. 20

1970年IAGCシンポジウムを終わって

三 宅 泰 雄

本学会員を中心として組織され、運営された1970年水地球化学・生物地球化学国際会議と、同位体地球化学セミナーは、無事におわった。外国からの参加者は、予定のとおり110名であったが、国内からの参加者は250名にものぼり、予想を大きくうわまわった。

このシンポジウムを、わが国でひらくはなしがでたところは、水、生物の地球化学では、対象がせますぎて、多くの人々の関心がえにくいのではないか、ともいわれた。そのために、べつにセミナーをもつことが提案されたのであった。

しかし、シンポジウムのプログラムの編成の段階で、比較的広汎な、また多彩な課題をとりあげることにしたため、じっさいには、内外ともに、ひろい専門分野から多数の人が参加した。

あたりまえのことであるが、組織委員会がかんがえたことは、第一線の著名な科学者に来てもらうこと、できるだけ多くの国から参加してもらうことであった。このかんがえは、ある程度は実現したとおもう。しかし、いろいろな事情、たとえば、同じ週に、ノールウェイで、べつのシンポジウムがひらかれた、などのこともあり、かならずしも、満足とはいえなかった。

連絡がつけにくいことで定評のあるソ連の科学者については、あらゆるルートをつかって連絡を密にしたため、ほとんど支障がなかった。すぐ、あとでひらかれた海洋学の会議にきたソ連科学者40名が、ついに上陸できなかったことと、およそ対称的であった。ただ、ヴィノグラドフ博士ほか、1,2の科学者が病気のためにこられなかったことは、ざんねんであった。

外国からの科学者に、日本の科学事情をよく知ってもらい、日本の科学者との交流を密にするために、地質調査所、東大海洋研究所、東大応用微生物研究所への訪問、シンポジウム終了後の箱根地方への研究旅行などが

もたれた。スタディー・ツアーには外国からの科学者の半数が参加し、研究旅行にも30名ちかくが参加し、このころみは成功であった。

このほかにも、個々の科学者たちのあいだで、旧交をあたため、あるいは、あらたに知己を得るなど、国境をこえた、たのしい出会いが、数々あったにちがいない。

こんど、はじめて会場にテレビジョンをもうけてみたことも、好評をうけた。参加者たちは、講演会場のそとで、コーヒーをのみながら、講演をきくこともできた。

会議は、日本学術会議の主催であったが、国費の支出は、いたってわずかなので、いきおい、寄附にたよらざるをえなかった。日本学術振興会に募金委員会をもうけ、柴田雄次先生に委員長をおねがいした。おかげで、800万円の募金予定額の100%を達成することができた。ユネスコから8,000ドルの寄附があり、IUGGからも寄附がよせられた。じっさいに使用した資金は、総額1,600万円で、そのうち650万円は、外国人の旅費、滞在費の援助につかわれた。

このシンポジウムとセミナーが、日本のわかい地球化学者にあたえた刺激は大きかったとおもう。しかし、なお、ことばの障壁のあついても事実であり、これが科学者たちの自由な交流をさまたげているのである。情報化時代とはいうが、このことは、急には解決のできない最大の難問である。

日本ではじめての、地球化学のための国際会議が、予期以上の成功をおさめたのは、本学会の会員の努力の結果のたまものであり、組織委員会委員長として、私は会員諸兄姉にあつく御礼を申しあげたい。また、この会議の後援をして下さった本学会はじめ、内外の多くの学術団体（外国10、国内22）の御好意にも感謝の意を表したい。

より良いシンポジウムを

小 穴 進 也

1970年 IAGC シンポジウムのもたらした利点は既に種々紹介されている。最初の試みが成功したら、その印象のうすれないうちに第2回の企画をはじめるべきであろう。そしてそのためには第1回の欠点を反省して改良することが大切である。

IAGCから提示されたテーマは hydrogeochemistry (H) と biogeochemistry (B) の二つであった。日本側で多くの議論をしてやっと追加してもらったのが2日間の Seminars (S) であった。それに対して参加の登録をした国内の日本人の数は H125, B60 および S132 であった。多くの日本人が S に関心をもったのに多くの外国人は S に出席しないで日本を去った。国際学会の開催にあたって開催国の意見がこれ程入れられない話を他では聞かない。この次はテーマについて日本で十分に議論し IAGC と相談してテーマをきめるべきである。学会、合同委員会および多分 IAGC も含めて民主化が必要である。

みじめだったのは Communication であった。我々のしゃべった英語のどれだけが外国人に理解されたか、はっきりは分らないが恐らく心細いバセントであろう。外国人のしゃべった英語のどれだけが分ったかは我々自身

よく知っている。そして discussion にはその二つの相乗効果が現われた。

これを改善する方策は何か。学会としては同時通訳あるいは通訳の方向へ努力すべきであろう。しかし次回までの時と金の準備の制約がある。最少限度しなくてはならないことは適当な cochairman を用意することである。そしてその人達を discussion の場での日英両語の interpreter として義務づけるのである。

我々個人としては英語に強くなるように最大の努力をする。英語をしゃべることの目的は人に理解されることである。それは必ずしも立派な英文と発音を要求するものではない。同僚や先輩にきいてもらって英語で discussion をやればお互いの練習にもなる。英語をきくことの練習はラジオ、テレビ、映画その他手当たり次第多い程いい。

最後に、語られる言葉は思想を表現する手段の一つに過ぎないことを強調したい。いい仕事をして Geochemical Journal その他に発表することは基本的に最も大切である。その上に立てば、まずい英語をしゃべったって、立派に通用するであろう。

IAGC (1971年) 国際会議

IAGC 国際会議が 1971 年 7 月 20 日から 25 日にわたリソ連 (モスクワ) で開催されます。

この会議の主題は “geochemistry of processes in the Earth's crust with particular reference to the physico-chemical aspects of geochemical processes” でつぎの研究発表が予定されています。

- Section 1: Magmatic Processes
- Section 2: Hydrothermal Processes
- Section 3: Metamorphic Processes
- Section 4: Sedimentary Processes

すでに First Circular の期限は切れています (1970. 11. 1) が Seconc Circular はでていません。なお講演要旨のメ切期限は 1971 年 1 月 1 日 (250語以内) 組織委員会まで必着のこと。

組織委員会: Organising Committee of the International Geochemical Congress, USSR Academy of Science, V. I. Vernadsky Institute of Geochemistry and Analytical chemistry, Vorobyevskoe shosse, 47a, Moscow V-334, USSR.

日本学術会議選挙有権者名簿の登録について

標記の件に関し学術会議選挙管理委員会から下記の連絡がありました。

記

1. 登録用カードの提出について

① 前回 (第8期, 昭和43年) の選挙の有権者については、前回提出のカードにより、本年資格審査が行なわれました。

これに関し、日本学術会議中央選挙管理会から登録用カードを提出されるよう通知のあった方以外の方は、すべてひきつづき有権者名簿に登録されますから、あらためて登録用カードを提出する必要はありません。

ただし、前回の登録における所属以外の部または専門で今回の登録を求めようとする方は、別記様式第2の「所属部または専門変更届」により、登録用カード用紙を請求してください。

② 前回の選挙の有権者以外の方および前回の選挙の有権者で中央選挙管理会からあらためて登録用カードを提出されるよう通知のあった方が、今回の選挙に登録を求める場合は、中央選挙管理会に登録用カード用紙を請求入手のうえ、昭和46年3月31日までに中央選挙管理会に必着するよう登録用カードを提出してください。

なお、4月1日以後に到着した登録カードは、次回 (第10期, 昭和49年) の会員選挙の登録用カードとして中央選挙管理会で保管します。

2. 登録用カード用紙の請求について

① 登録用カード用紙の請求に関し、大学・研究機関等に対しては「登録用カード用紙請求者名簿」の提出を依頼しました。中央選挙管理会では、名簿が提出されれば名簿に基づいて当該大学・研究機関あてに、登録用カード用紙を一括して送付します。

したがって、中央選挙管理会から名簿提出を依頼された大学・研究機関等に所属する方で、既に個人としてカード用紙を請求した方以外の方は、なるべく所属の大学・研究機関等から提出する名簿によって、登録用カード用紙を請求してください。名簿によって請求する場合は、個人からの請求は不要ですから、重複して請求しないよう特に注意してください。

② 前記の大学・研究機関等に所属しない方でカード用紙を請求する方は、別記様式第1により「登録用カード用紙請求書」を直接、中央選挙管理会あて提

出してください。

3. 有権者等の異動届について

有権者は氏名、住所 (住居表示の変更を含む)、本籍、勤務機関および職務、勤務地等のいずれかに異動があったとき、または博士の学位を取得した場合には、そのつどすみやかに、別記様式第3により、「有権者異動届」を中央選挙管理会に提出してください。これを怠ると、有権者の権利を行使できないことがあります。

なお、登録用カード提出者は、有権者名簿に登録される以前においても異動の届を励行してください。また、本人が死亡した場合は、その旨を、遺族またはその関係者から届け出てください。

〒166 東京都港区六本木7丁目22番34号
電話 (03) 403-6291

日本学術会議中央選挙管理会

様式第1

登録用カード用紙請求書	
(ふりがな) 氏 名	④
住所 (郵便番号)	
勤務機関および職名 (又は自営の職業名)	

様式第2

所属部または専門変更届	
昭和 年 月 日	
日本学術会議中央選挙管理会 御中	
(現登録の所属)	第 部 学 地方区
(ふりがな) 氏 名	④
わたくしは、現在の専門を変更いたしたいので登録用カード用紙を請求いたします。	

有権者異動届

日本学術会議中央選挙管理会 御中

昭和 年 月 日
第 部 学 地区(ふりがな)
氏 名

㊤

下記のとおり異動がありましたからお届けします。

事 項	(新)	(旧)
1 氏 名		
2 住 所 (郵便番号)		
3 本 籍		
4 勤務機関および職名		
5 勤務地 (郵便番号)		
6 博士の学位	① 学位の種類 ③ 授与年 昭和 年	② 授与大学 ④ 所属学会

- (注) 1. 事項1～6のうち該当事項のみ記載すればよい。
2. 新たに博士の学位を取得した者は、学位の種類、授与大学、授与年とともに、かならず所属学会名を記入すること。

ユネスコ職員候補者の募集について

日本ユネスコ国内委員会から下記内容の依頼がありました。

記

ユネスコには行政職の職員定員が約2,000 技術援助職の職員定数が約1,300あり、職員は各加盟国から採用されておりますが、現在のところ、日本人ユネスコ職員は、前者についてはわずか11人(わが国が有するわくは、1969～1970年度31人、1971～1972年度には45人の見込)、後者についてはわずか4人(わくはない)にすぎません。

ユネスコ事務局では、毎年多くの欠員が生じ、新規採用のため、各加盟国から候補者を募集しております。わが国がユネスコに対して積極的に協力するためには、多くの日本人がユネスコの職員となることが期待されております。

当委員会は、このような現状にかんがみ、ユネスコ職員となる希望と資格を有する者(特に工学、理学、農学、教育学の分野の専門家)を候補者としてできるだけ多く

ユネスコ側へ推薦したいと考えであります。

なお職務内容、任期、待遇、資格要件(技術援助職員候補の年令の下限は35才ぐらい)などくわしくお知りになりたい方は下記に問合せ下さい。

照会先 ㊤100 東京都千代田区霞が関 3-2-2

文部省 日本ユネスコ国内委員会事務局総務課
TEL. (03) 581-1932

新 会 員

(1970. 10. 17～11. 22)

谷田部 衛 栃木県衛生研 東北薬大 (1957)

増沢 敏行 京大理在学中

松井 正和 京大化研 京大理 (1961*)

カッコ内は大学修了年次、*大学院修士課程修了年次

(訂正)

ニュース No. 51(1970. XI. 25) 中の新会員〔早川博信 福岡県衛生研 名大理〕は〔早川博信 福岡県衛生研 名大理〕の誤りでした。おわびして訂正します。

学会事務所 東京都杉並区高円寺北 4-35-8

気象研究所 地球化学研究部

ニュース 東京都世田谷区深沢 2-1-1

発行所 東京都立大学理学部化学教室

(編集担当) 半谷高久・石渡良志

日本地球化学会ニュース

No. 53

1971. II. 15

総 会 報 告

1970年11月23日、東海大学海洋学部において、岡部史郎評議員が議長となって、会員約90名出席のもとに総会が開催された。

1. 1970年度事業中間報告

1.1 総会

1970年11月23日、東海大学海洋学部(清水)で開催

1.2 例会

第47回(1970年2月14日) 東大理, 化学教室

(1) 地球化学標準試料について

地質調査所 安藤 厚

(2) 水銀の地球化学と地球化学探査におけるその有効性

秋田大, 教育 椎川 誠

第48回(1970年6月13日) 東京学士会館(本郷)

(1) Rb/Sr法による飛弾変成帯の地質年代

地質調査所 柴田 賢

(2) Ca-Fe-Ti-O系の相平衡と岩石中のTiの挙動

無機材研 木村 茂行

第49回(1970年10月17日) 名大, 理, 物理教室

(1) 炭酸塩堆積岩に関する最近の話題

金沢大理 小西 健二

(2) 汚染水中の有機物をめぐる諸問題

都立大理 半谷 高久

1.3 討論会

1970年11月22～24日 東海大学海洋学部で開催

課題討論I コロイド様物質の地球化学的役割

(11月22日)

課題討論II 地殻およびマントルの化学

(11月22日)

1.4 評議員会

1970年2月14日 東京学士会館本郷分館

4月4日 気象庁海洋気象部会議室

6月13日 東京学士会館本郷分館

10月17日 名鉄グランドホテル会議室

11月22日 東海大学海洋学部会議室

1.5 ニュースの発行

No.49 (1970, 5. 20), No.50 (1970, 9. 10), No. 51 (近日中に発送), No.52 (年内発行予定)。尚, No. 53は次年度おくりとなる。

1.6 事務所の移転

1970年1月より、本学会事務所は、名大, 理, 地球科学教室より、気象研究所地球化学研究部に移転した。

1.7 評議員の追加

岡部史郎(任期一年)、猿橋勝子、杉浦吉雄の三氏が追加された。

1.8 幹事、監事の委嘱

石渡良志(庶務)、小倉紀雄(庶務)、杉村行勇(庶務、会計)、水谷義彦(編集)の4氏に幹事を、野口喜三雄氏に監事を委嘱した。

1.9 IAGC シンポジウム

1970年9月6日～12日、日本都市センターで開催された。

1.10 会誌の発行

“地球化学” vol. 3, “Geochemical Journal” vol. 3, Nos. 2/3, 4, vol. 4. No. 1 が発行され、ひきつづいて Nos. 2, 3 も今年度内に発行の予定。

“地球化学” vol. 4, および “Geochemical Journal” vol 4, No. 4 の発行は次年度に繰りこされた。

2. 1969年度会計決算報告

ニュース No. 48 に報告したように、決算報告が行なわれ、承認された。